「食育」や自治体間の連携、景観などのアプローチから、
販路の拡大や川根茶ファンの獲得を目指す取り組みが始まっています。

西伊豆町と「茶の普及と振興に関する協定」を締結

3月29日、西伊豆町と川根本町は、静岡茶の普及と振興を目的とした協定を締結しました。

この協定では、県の「小中学校の児童生徒の静岡茶の愛飲の促進に関する条例」が施行されたことを契機に、茶文化の伝承や販売促進に関して両町が連携して取り組むことを内容に盛り込んでいます。

協定の締結により、川根本町としては、緑茶になじみが薄く消費量も比較的少ない伊豆地域で、川根茶の販路を拡大させるきっかけづくりを図ります。また茶の生産が盛んではない西伊豆町としては、高品質な川根茶を利用して、町民、特に町内の子どもたちに対する茶の愛飲活動を推進することができます。

4月上旬には、協定に基づく事業として、川根茶業共同組合が西伊豆町内の中学校に川根茶を提供しました。

また今後は、西伊豆町民を本町に招待して茶摘み体験を実施したり、西伊豆町内でお茶の入れ方教室を開催したりして、川根茶をきっかけとした両町の人的交流促進に取り組んでいく予定です。

㊧西伊豆町長（当時）に学校名入りの茶箱を渡す㊨鈴木町長。

「小中学校の児童生徒の静岡茶の愛飲の促進に関する条例」

昨年12月制定・施行。「日本一の茶産地」として、県内の子どもたちが茶を愛飲するための食育を推進することを目的としています。

自治体や学校法人などに対しては、給食時や休み時間に児童・生徒が茶を飲む機会を設けるよう努力義務を課しています。

川根高校「お茶摘み実習」

1年生44人が、町農林業センターの茶園にて「お茶摘み実習」を行いました。

生徒たちは町職員の手ほどきで、新芽を一芯二葉でていねいに摘みました。また同センター内の製茶工場も見学し工程を学びました。

同校の須藤隆広校長は「実際に自らの手で摘むことで、口に入るまでの生産者の思いと、茶業への魅力を感じてほしい」と、生徒への期待を込めて話しました。

「川根留学生」の田中唯斗さん（掛川市出身）は「初めて摘んだけど、元気な新芽を見つけるのが楽しかった。機会があれば、またぜひやってみたい」と感想を口にしました。

「川根茶」のさらなる振興に向けて

ＳＬに手を振る「茶摘み体験ツアー」の参加者（崎平区）。

茶園景観をきっかけに川根茶ファンの獲得へ

町茶業振興協議会は、町内の茶園景観を題材にして国内外からの誘客を促進し、茶業の活性化と地域振興を図ろうと、昨年7月に「美しい茶園でつながるプロジェクト実行委員会」を立ち上げました。

同実行委員会は、生産者や茶商、農協、行政機関などで構成します。取り組みの調整・推進役となる「デザイナー」は、日本茶インストラクターの土屋裕子氏と、町内でエコツーリズムを手掛けるエコティかわねが務めます。平成30年度までの3年間で、茶園景観と茶摘み体験をセットにしたツアーの開催をはじめ、誘客のための仕組みづくりに取り組みます。また、美しい景観の下で製造されたことを強みとした商品の開発により、川根茶の消費拡大も目指します。さらに、受け入れ側の町民の意識向上や、ＳＮＳを活用した情報発信力強化のための研修も実施する予定です。

5月7日には、同実行委員会の事業として「茶摘み体験ツアー」が崎平区で開催され、県内外から10人が参加しました。参加者は、線路沿いの茶園にてお茶摘みを体験したほか、茶工場で製造工程を見学したり昼食にお茶の天ぷらを食べたりして、川根茶の文化を体感しました。

「茶摘み体験ツアー」参加者の声

矢野 裕彦（まさひこ） さん 一家（愛知県東海市）

自然の中で子どもを遊ばせることのできる場所を探していて、偶然このツアーを見つけました。

茶摘み体験は今回が初めて。周りの風景もきれいだし、ずっと摘んでいられそうなぐらい楽しかったです。また、お茶の葉は固そうなイメージでしたが、触ってみるととても柔らくて驚きました。

実際に体験をしてみることでこの地域に親しみを感じるようになりましたし、他の産地と比べても、川根茶を買いたくなりますよね。（裕彦さん）